様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成　３０　年　　５　月　２８　日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６７０６

研究課題名（和文）スティーグリッツ・サークルにおける触覚の表現

研究課題名（英文）The Expression of Touch in the Stieglitz Circle

研究代表者
高村　峰生（TAKAMURA, Mineo）

神戸女学院大学・文学部・准教授

研究者番号：９０６３４２０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：　この研究費によって、博士論文において着手していたアルフレッド・スティーグリッツと彼の芸術家サークルについての研究を深めることができた。スティーグリッツ・サークルの芸術家たちは新しい国にふさわしい芸術の新しい形式を生み出そうと努力するなかで、しばしば触覚的な身体性を強調し、それを「美的な距離」と呼ばれるような伝統的な基準への反論としたのであった。
　この研究の成果の一部は2017年に『触れることのモダニティ』という著作の形で公表することができた。

研究成果の概要（英文）：　The research fund made it possible to develop my research about the cultural impact of Alfred Stieglitz and His Circle, which I had initiated in my Ph.D dissertation. In their struggle to create a new form of art appropriate to the new nation, artists in the Stieglitz Circle often emphasized the importance of tactile physicality, putting it as an antithesis against the traditional norm of "aesthetic distance."
My 2017 book _Tactility and Modernity_ reflects a part of the outcome of this research.

研究分野：比較文学

キーワード：写真　アルフレッド・スティーグリッツ　モダニズム　アメリカ美術

１．研究開始当初の背景

2011 年にアメリカのイリノイ大学比較世界文学に提出した博士論文 ***Tactility and Modernity; The Sense of Touch in D. H. Lawrence, Alfred Stieglitz, Walter Benjamin, Maurice Merleau-Ponty*** がこの研究の出発点となっている。同論文は、西洋の視覚の地位が 20 世紀になって失墜するにともなって、触覚的なもののイメージや言説が前景化してきたことを、副題にある 4 人や彼らの周囲にいた人物たちの作品の考察を通じて論じたものである。今回の研究は、この博士論文のプロジェクトのうち、スティーグリッツに当たる部分について特に調査を深めようとしたものである。博士論文は日本語に翻訳して研究書として刊行する予定が当初すでにあった。しかし、そのためにはこのスティーグリッツ・サークルについての調査を深めることが肝要であるように思われた。

博士論文は比較的短期間に書かれたため、スティーグリッツについて論じている章については、そこで私が言及した詩人、批評家、画家、写真家などについてさらなる研究が必要であった。さらに、アメリカの大学図書館に所蔵されているスティーグリッツの手になる未刊行の大量の手紙にもあたる必要を感じていた。

さらには、今後の研究の方向性として、モダニズムにおける写真の重要性に注目するようになっていた。写真がどのように世界や自己についての認識を規定するとともに解体したかということは、このメディアが急速に大衆のあいだに広まった 20 世紀前半という時期を考えるためのカギとなるポイントである。したがって、研究計画に書いたスティーグリッツ・サークルに考察を集中させるのではなく、広く写真家たちについて知見を広げようというのも当初の目論見であった。

これが研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

アメリカ写真の父と称されるアルフレッド・スティーグリッツの活動の特徴の一つは、それが様々な芸術家との交流や共同作業を含んだ集団的なものであったということである。彼は、住所の番地を冠した「291 ギャラリー」をニューヨークのマンハッタンに開くことで、積極的にヨーロッパの前衛芸術をアメリカに紹介した。そこに集った画家、写真家、作家、詩人、批評家、建築家などよる芸術家集団は、まとめて「スティーグリッツ・サークル」と呼ばれている。彼らは『カメラワーク』という雑誌を発行し、そこですぐれた若手写真家の作品を意欲的に発表すると共に、劇的な変化のうちにあった最新の西洋の絵画芸術をいちはやくアメリカに紹介した。『カメラワーク』は絵や写真だけでなく、新しい作風の詩や評論も積極的に紙面に掲載し、総合芸術雑誌のような役割を果たした。スティーグリッツ・サークルの活動はこのように写真芸術の範囲を大きく超えており、彼のギャラリーや雑誌は、20 世紀初頭のアメリカに新しい芸術を導入するのに重要な役割を果たした。もちろんスティーグリッツへのかかわりの深さは個々人によって大きく異なったが、彼らの共有した芸術観、身体観、技術観、国家観はアメリカン・モダニズムの形成に多大な影響を与えたのである。

本研究の目的は、彼らを束ねていた身体観の根底に触覚に対する真実性の付与があったことを論証し、アメリカン・モダニズムにおいてそれがどのような意義を持ったのかを考察することであった。スティーグリッツ・サークルに属する芸術家たちの作品を見ていくと、それが視覚芸術か言語芸術家を問わず、きわめて頻繁に触覚的なものが現れ、肯定的な意義が与えられていることが分かる。たとえば、スティーグリッツは妻ジョージア・オキーフの「手」をいろいろなポーズによって撮影しているし、触覚こそが芸術が表現しなければならない真実であると様々な媒体で強調していた。詩人のウィリアム・カーロス・ウィリアムズは、1920 年代に著したアメリカ史において触覚の重要性を語っており、さらに晩年にはモダニズムの特徴をなすのは物質的なものへの触覚的感性であったと 1920 年代の芸術的風土を回顧している。彼らがこのように触覚に肯定的に言及するのは、この芸術家集団内部の相互的な影響関係の結果であると言ってよい。

なぜ 20 世紀の初頭のニューヨークの芸術において、これほど触覚的なものが強調されたのか。このことを考えるためには、そもそもの西洋文明における触覚の地位を確認しなければならない。プラトンやアリストテレス以来、西洋において視覚は知性や理性と結び付けられてきた。心身二元論を唱えるルネ・デカルトは、視覚を目という特定の身体器官を超えて心（＝思惟実体）の作用と結びつけており、すべての感覚の中で「もっとも包括的で高貴な」ものであると断言している。これとは対照的に触覚は動物的、本能的な感覚として文化のなかで周縁化されてきた。それは内在的な価値を持つものであるというよりは生存の条件とみなされ、芸術や知性とは切り離されてきたのである。しかし、マーティン・ジェイの ***The Downcast Eyes*** などが明らかにしたように、20 世紀の芸術や哲学において視覚的なものの価値はその権威を失い、逆に多くのモダニストが触覚を転覆的な身体感覚として強調した。触覚が歴史的意義を持つのはこのような文脈においてである。それはモダニズムにおける多くの表現方法の革命と軌を一にしていたのだ。

私は 2011 年にアメリカの大学の比較文学科に提出した博士論文において、このような観点からモダニズムにおける触覚を考察した。スティーグリッツ・サークルにおける触覚の問題についても、その一章を割いて論じ

たが、これは研究の総まとめというよりはその端緒となるべきものであった。スティーグリッツ・サークルの活動は多岐にわたり、そのメンバーの作品を丹念に考察することは出来なかったのである。本研究では、博士論文執筆の際に浮上したいくつかの論点を中心に研究を掘り下げるとともに、調査が十分でなかった範囲を補っていく。たとえば、博士論文では第一章を D.H.ロレンスにおける触覚言説の考察にあてているが、これとスティーグリッツ・サークルにおける触覚言説との影響関係は重要である。ロレンスはきわめて意識的に触覚的なものを視覚的なものに対する対抗言説として用いていたし、スティーグリッツ・サークルの多くはロレンスの作品を愛読していた。また、スティーグリッツは絵画作品をニューヨークで展示する計画を立ててロレンスと連絡を取っていた。しかし、直接的な影響関係を突き詰めるよりは、ロレンスとスティーグリッツが触覚をモダニズムの時代においてどのように捉えていたのか、という点について共通点と相違点をまとめていくことで両者の身体観の特徴が浮き彫りにされると思う。

３．研究の方法

本研究は、申請者が大学院以来養ってきた比較文学的なアプローチによって、既存の学問分野の枠組みを横断する形で、哲学的、批評的著作や文学、文化的作品、絵画、写真など様々な表現を歴史的言説・イメージとして考察の対象とした。

具体的な研究方法としては、適切な文献資料を幅広く集めて、それらを熟読し考察することがきわめて重要である。研究の中心的な資料となる『カメラワーク』は国内において閲覧可能であるが、スティーグリッツやその周辺の知識人たちの残した膨大な未出版原稿については、主としてアメリカ合衆国の大学図書館や公共図書館での調査が必要であった

研究書の執筆というのは、人文社会系研究においてはきわめて重要な作業である。というのも、単に研究した内容を機械的に記述すればよいということではなく、記述する言語そのものの洗練が研究の質と直接に関わってくるからである。そのため、ひとまず研究成果を書き尽くした後もそれを何度も再検討して、学術的な水準は高く、しかも読みやすい書物の構成を心がけた。また、どうしても一冊の書物に盛り込むことの出来ない要素は出てくるはずなので、それについても後の研究に活かせるように研究成果を整理しておいた。こうしたまとまった研究の余滴については、雑誌論文や学会発表のような形で小さな規模において研究のまとめをすることで、成果を残しておくようにした。

４．研究成果

1）平成 27 年度

スティーグリッツ・サークルにおける芸術と彼らの触覚的認識のかかわりについての考察を進めた。この研究以前に進めていた D.H.ロレンスにおける触覚性とのつながりも見えてきたので、そちらの方に立ち戻り、理解を深めることもあった。3 月 26 日に福岡大学で催された第 62 回ホーソーン協会九州支部会シンポジウムでは、ロレンスのホーソーン論についての発表を行った。また、次年度の 5 月に英文学会でアメリカの小説家であるスティーヴン・クレインについて発表を行うことが決まり、クレインの文学作品に対して南北戦争の写真がいかに影響を与えているかということについて考察を深めた。この考察はスティーグリッツ・サークルの研究とは直接的な関係はないが、同時代のアメリカにおいて写真的なものがいかに現実世界を把握する手立てとなっていたかということについての理解を深めることができた。

また、9 月 19 日から 24 日にかけてはニューヨーク大学バッファロー校において、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズやアルフレッド・スティーグリッツの手紙を調査することができた。短期間で十分な調査ができたとは言い難いが、今後の研究の基礎となる資料の収集を行うことができた。

2）平成 28 年度

スティーグリッツ・サークルについて図書館資料の利用や購入した研究書の読解を通じて文献的な調査を進めるとともに、この研究の成果が一章として含まれる単著の執筆に多くの時間を割いた。その単著は、2017年2月27日発行の『触れることのモダニティ―ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』という書物として以文社より刊行された。この書物はもともと2011年にイリノイ大学比較文学科に提出した博士論文に基づくものであり、すべて英語で執筆されていた。それを日本語にして刊行したわけであるが、ただ邦訳したというにとどまらず、日本の読者や研究者のあいだで共有されているコンテクストが博士論文の時とだいぶ違っており、それを考慮に入れた慎重な執筆が必要であった。分野横断的な比較文学の成果である本書は、日本語の書物としては極めて珍しい試みとして複数の書評で取り上げられた。

スティーグリッツ・サークルについてはこれまで文学研究者による研究はアメリカ、日本問わず少ないが、この時期の触覚をめぐるイメージや言説の研究は、ウィリアム・カーロス・ウィリアムズ、シャーウッド・アンダーソンなど、スティーグリッツ・サークルに直接に関わった作家たち、あるいは直接にはかかわらずとも同時代のアメリカ東部の作家のうち視覚芸術にも強い関心を持った

様々な作家たちの作風に大きな影響を与えていることが分かった。そこで、これらの文学的な表現における身体表象に視野を広げ、研究を進めていたところ、当初の二年間という研究期間では足りなくなったため、さらに一年を延長して、当テーマをより包括的に探求していくことにした。

3）平成 29 年度
　著作の刊行以後、それをめぐる対談やシンポジウム、レクチャーが相次ぎ、それらへの準備に多くの時間を割いたが、さまざまな有益なレスポンスを得ることができた。スティーグリッツの章についての関連で言えば、触覚的なものについての理念が芸術家集団内で共有されていたとしながら、具体的に例として挙げられている写真が手を写したものばかりであるのは広がりがないという指摘があった。
　同年度にはまた二つのシンポジウムに参加したが、そのうちの一つでは、作家ジェイムズ・エイジーと写真家ウォーカー・エヴァンスの共作である ***Let Us Now Praise Our Famous Men*** を分析することができた。これは大恐慌化における写真とテクストの関連を考察するという次のプロジェクトにつながる成果であると言える。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　6　件）
① 高村峰生、「触覚的な暗がりの方へ―D.H. ロレンスの Sketches of Etruscan Places における古代エトルリアとイタリア・ファシズム」『英文学研究』、日本英文学会、査読有、和文 92 号、2015 年、1-19
② 高村峰生、「「忘れられた人々」が思い出されるとき　トランプ時代に読まれるシンクレア・ルイス」『ユリイカ・特集アメリカ文化を読む』、査読無、青土社、2017 年 1 月号、164-171

〔学会発表〕（計 8 件）
① 高村峰生、「燃え上がる枠組、消尽する描写―スティーヴン・クレインにおける写真的無意識、近接性、死」、日本英文学会第 88 回全国大会、シンポジウム「メディア、帝国、19 世紀末アメリカ」、京都大学、2016 年 5 月 29 日
② 高村峰生、「D・H・ロレンスとジェンダー研究、あるいは「快楽」の問題」、第 3 回センター研究会、奈良女子大学アジア・ジェンダー文化学研究センター、奈良女子大学、2017 年 3 月 10 日
③ 「近接性と反美学―ウォーカー・エヴァンスとジェイムズ・エイジーによる 1930 年代のポエティックス」、第 61 回日本アメリカ文学会関西支部大会、フォーラム「ポエティックスと危機の表象」、神戸大学、2017 年 12 月 2 日

〔図書〕（計 1 件）
高村峰生、『触れることのモダニティ――ロレンス、スティーグリッツ、ベンヤミン、メルロ＝ポンティ』、以文社、2017 年、312 頁．

〔その他〕
ホームページ等
『触れることのモダニティ』を紹介するページ
https://duras1999.wixsite.com/mysite

6．研究組織
(1) 研究代表者
　高村　峰生　（TAKAMURA Mineo）
　神戸女学院大学・文学部英文学科・准教授
　研究者番号：　９０６３４２０４